歌唱の印象に及ぼすしゃくりの効果

○重野 純¹・新妻菜津美² (非会員)

(¹ 青山学院大学教育人間科学部・²ECC)

キーワード: しゃくり, 歌唱の印象, 時間長

Effects of *shakuri* on the impression of singing

Sumi SHIGENO¹ and Natsumi NIITSUMA^{2,*}

(¹Aoyama Gakuin University, ²ECC)

Key Words: *shakuri*, impression of singing, temporal duration

目 的

歌唱者が歌唱の評価を高めようとして用いるテクニックの一つに、「しゃくり」がある。しゃくりは「音を下から上へと上昇させてしゃくり上げる歌い方」(中里, 2007)であり、音と音を滑らかにつなげる役目をもつ「子音こぶし」を指す。日本独特の歌謡曲や演歌、また J-POP などにおいても歌唱者によって用いられており、カラオケ機器では採点基準にも取り入れられているが、ビブラートに比較するとほとんど研究されていない。そこで本研究ではしゃくりが歌唱に与える効果について、しゃくりの時間的長さ(時間長)による効果に焦点を当てて検討する。

方 法

被験者 聴覚健常な大学生 20 名(男性 5 名, 女性 15 名, 平均 21.8 歳)を被験者とした。

刺激 曲調の影響をみるため、バラード(逢いたくていま/MISIA)と明るいアップテンポの曲(スイミー/Every Little Thing)の 2 曲の J-POP を選んだ。女性 2 名が何の指示も受けずに普段通りに歌い、そのサビ部分を Cubase5 (Steinberg) を用いてカラオケ音源にミックスダウンした。図 1 は低い音から目標音へしゃくり上がった「しゃくりの発生箇所」を示す。これを元刺激とし、その時間長を 2 倍, 1/2 倍に加工したパターンを作成して、6 種類の刺激(3 パターン×2 曲)を作成した。曲の提示時間は 1 分弱とした。

手続き 質問項目は岩下(1979)からしゃくりによる評価の違いが現れそうな項目を 13 項目抜粋し、さらに歌唱の印象の変化を調べるため「感動する-感動しない」、「歌がうまい-歌がへた」を加えて、計 15 項目の形容詞対とした(表 1)。SD 法を用いて 5 段階の判断を求めた。刺激曲は PC (SONY, VAIO) からスピーカー (YAMAHA, MSP3) を通して聴きやすい大きさ(約 75dB)で提示した。被験者には曲ではなく歌唱についての印象を評価させた。6 曲の間隔は 1 分間ずつあけ、その間に判断を記入するようにした。6 曲の提示順序はカウンターバランスした。

表 1 形容詞対

明るい	-	暗い
テンポの違い	-	テンポのおそい
深みのある	-	うすっぽい
変化に富んだ	-	単調な
にぎやかな	-	落ちついた
浮き浮きした	-	しみじみした
はげしい	-	おだやかな
上品な	-	下品な
優雅な	-	がさつな
派手な	-	地味な
安定した	-	不安定な
さっぱりした	-	ねっとりした
感動する	-	感動しない
歌がうまい	-	歌がへた
好き	-	きらい

図 1. しゃくりの箇所

結 果

判断は得点化(1~5)して平均値と SD を求めた。2 曲とも「しゃくり 2 倍」は得点が低い傾向にあった。SD は大きい傾向だった。さらに、因子分析(最小二乗法, プロマックス回転)を行ったところ、3 因子が抽出され(固有値 1 以上)、これらの因子を好感, 活動, 粘着と名づけた(表 2)。因子ごとに 2 要因 3 水準の反復測定分散分析を行った。

表 2 因子負荷量

因子名	形容詞	因子		
		1	2	3
好感	感動する-感動しない	.911	.148	-.179
	優雅な-がさつな	.879	-.206	-.258
	歌がうまい-へた	.878	.005	.046
	上品な-下品な	.743	-.264	.127
	好き-きらい	.741	.212	.139
	安定した-不安定な	.654	-.166	.231
活動	明るい-暗い	.479	.389	.121
	にぎやかな-落ちついた	.044	.801	-.052
	はげしい-おだやか	-.073	.784	-.190
	浮き浮き-しみじみ	-.178	.516	.165
粘着	さっぱり-ねっとり	-.027	-.097	-.965
	テンポのはやい-おそい	.065	.401	.434

[好感因子] 交互作用(曲×パターン)は有意でなかった。しゃくりの主効果は有意であり($F(2, 38) = 17.10, p < .001$), 多重比較(Bonferroni)の結果, 時間長が長い方が印象は悪かった(「元刺激」よりも「2 倍」($p < .001$), 「半分」よりも「2 倍」($p < .01$))。曲についてはバラードの方が好感度は高かった($F(1, 19) = 12.62, p < .01$)。

[活動因子] しゃくりの効果は認められず(交互作用, しゃくりの主効果とも有意でなかった), 曲についてはアップテンポの曲の方がより活動的であった($F(1, 19) = 4.82, p < .05$)。

[粘着因子] 交互作用は有意差ではなく, しゃくりの主効果が有意であった($F(2, 38) = 7.67, p < .01$)。時間長が長い方が粘着性は大きかった(「元刺激」よりも「2 倍」, 「半分」よりも「2 倍」(ともに $p < .05$))。曲の違いによる差はなかった。

考 察

しゃくりを長くすると歌唱の印象は悪くなり, また粘着性が増すということがわかった。原因の一つとして, しゃくりの長さの変化が, 音程やリズムなど, その他の要素に影響を及ぼしていると考えられる。また, テンポが遅い曲ではしゃくり部分が長く聞こえるため印象が悪くなると考えられる。一方で, 評価得点の SD は大きく, しゃくりの長さの効果については個人の好みが大きく関与していることが示唆された。

引用文献

岩下豊彦(1979) オスグッドの意味論と SD 法 川島書店
中里南子(2007) 音楽教育実践ジャーナル, 5, 32-39.